

「//BG、夜のスクールバス後部座席」

小和田「でさあ聞いてよマツダ〜、アイツったらウチが勉強してたらさあ〜」

松田「へえー」

松田 M「二十一時、私立中学スクールバスの最終便。闇夜の中、バスは今最寄り駅に向かって運行している」

松田 M「中学の帰り。俺と目の前の女だけしかバス内にいない」

松田 M「俺達は最後列から二番目の席に。俺が窓際、女が通路側」

松田 M「女の名は小和田 彩花（こわだ あやか）」

松田 M「先天性の栗毛で、ミディアムに整えた髪の女。俺と同じクラスの中学六年生」

松田 M「多分学年で三番目くらいに男子の人気を得ている」

小和田「そういえば新任の田中先生、スゴイ真面目だよ〜。結構イケメンだし！」

松田「そうだな〜」

松田 M「窓の外、映り変わる夜の街並みを眺めながら、適当な相槌を打つ」

松田 M「小和田は一方的によく喋る女だ。俺はいつもこうやって、適当に相槌を打って流している」

松田 M「毎日最終便に乗る生徒なんて、俺とこの小和田くらいだ」

松田 M「俺はバスケット部、小和田は料理部なのだが、おそらく二人とも、お互いの部内で一番ストイック」

松田 M「部活終わってからも自主練しているから、帰りが二十一時の最終便になってしまう」

松田 M「ただし部内での成績は対称的だ」

松田 M「俺は陸上部内で下から数えた方が早い成績」

松田 M「一方、小和田は中学料理コンテストで一位を取る程の腕前。料理部でも部長」

松田 M「コイツの料理の才能を俺の長距離走の才能に変換して分けて貰いたいくらいだ」

小和田「あ、松田。いつもの上げる！」

松田 M「小和田はスクールバックからチョコレートの入った、手の平サイズの箱を取り出し、俺に渡す。いつものチョコ」

松田 M「他の友達にも上げているだろう義理チョコ」

小和田「さんくー」

松田 M「その場で箱を開けてチョコを味わう」

松田 M「バスが目的地までつくに約一時間。チョコを味わい尽くす時間は充分ある」

松田「ムシャリ、ムシャリ」

松田 M「……うまい！」

松田 M「甘すぎず、苦すぎない、いつもの味。何度食べても飽きない。市販のチョコじゃ味わえない、作りたての味」

松田「うん、いつも通り」

小和田「え～何その無表情。少しはリアクション取ってよ！」

松田 M「いつも通り、上手い——何故か正直に言う気になれない」

小和田「ねえ松田、ウチの悩み聞いてくれない？」

松田「どうしたん？」

松田 M「視線を口元のチョコに向け、頬張りながら適当な相槌」

小和田「ウチさ……好きな人が出来た」

松田「咀嚼を止め、視線を小和田へ向ける」

松田「へえ～、誰？」

小和田「三一Bの水城^{みずしろ}くん。この間体育の授業のバスケで一緒にチームになってさ、スゴイカッコ良かった！！」

松田 M「恋する乙女のように目を輝かせる小和田」

小和田「ウチ、今度水城君くんに告ろうと思うんだ」

松田「そう……水城君のどこが好きなんだ？」

小和田「それはもちろん——」

松田 M「バスが最寄り駅につくまで、俺はひたすら水城君が如何に性格イケメンかを語られ続けた」

「//場面転換。BG、主人公の実家の、一人部屋」

松田 M「ベッドに寝転がり、天井を見上げる俺」

松田「水城君……か……」

松田 M「水城君はサッカー部のエース。見た目よし、スポーツよし、勉強よし、三拍子揃っている。それでいて誰にでも優しい」

松田 M「中学5年生の時、彼と同じクラスだったから良く知っている」

松田 M「体育のサッカーで同じチームになって、俺がノーマークのシュート外した時も「ドンマイ！」と爽やかな笑顔で励ましてくれた」

松田 M「隣の席になった時なんか、学校休んだ次の日なんかは「松田、昨日授業休んだだろ？ ノート写させてやるよ！」とわざわざ向こうから声をかけてくれた」

松田 M「非の打ち所がない程、人間として良く出来たヤツ」

松田 M「……まあ、アイツと小和田ならお似合いだろう」

松田 M「小和田はおてんばだが、根から明るいヤツだ。裏が無い女」

松田 M「水城君となら裏が無い者同士、上手くやっていけるだろう」

松田「……アレ？」

松田 M「おかしい。胸が痛い、熱い」

松田 M「水城君はサッカー部の活動が終わるとすぐ帰る。きっと小和田は水城君の帰宅時

間に合わせるだろう」

松田 M「最終バスの時間まで残って自主練なんかやらなくなるだろう」

松田「なんか……胸……いてえ……」

松田 M「何で小和田に対してこんな気持ちになるんだろう？」

松田 M「俺には【アイツ】がいるのに」

松田「……バカが。「いるのに」じゃねえだろ。「いたのに」……だろ」

松田 M「一人だけの部屋で、思わず自嘲してしまう」

松田 M「その時、スマホがバイブする。ラインの着信」

松田「もしもし」

黒井「『おい松田。お前最近部活ばっかで付き合いわり一な。なんか小和田と一緒に帰ってるらしいけど……デキてんのか？』」

松田 M「俺の悪友、黒井 亮（くろい りょう）」

松田 M「中学生の癖にタバコは吸うは、教師に殴りかかるは、色々手に負えない、ダイナマイトみたいな男」

松田 M「何が起爆スイッチになってキレ始めるか分からない男。中一からの腐れ縁で五年間、付き合っているが……」

松田「いやいや、小和田も俺も自主練で最終バスまで残ってるから、たまたまバスと一緒になってるだけだよ」

黒井「『ふ～ん……』」

松田 M「疑われている……」

黒井「『でさ、小和田とどんな話するんだ？』」

松田「……」

松田 M「暫くの無言。沈黙の中、俺は小和田に彼氏を作らせない為の良策を……いや、『悪策』を……思いつく」

松田「アイツの恋愛相談だよ」

松田 M「黒井は口が軽い。色恋沙汰を話せばあっという間に、遊び半分な気持ちで噂を広めるだろう」

松田 M「そして小和田という女子は誰にでもフランクだ。きっと自分の好きな男子が誰かなんて、アイツの周りに集まる女子の一人や二人に、既に話している」

松田 M「だから、学年中に噂が広まったって、俺が広めたなんて分かりっこ無い筈」

松田 M「この黒井と俺は、五年間の腐れ縁だけあって、それなりに長い信頼関係を構築している」

松田 M「俺が不利になる噂は、絶対に広めない」

松田 M「不良男だが、まだ俺が付き合い続けている理由でもある」

松田 M「……な～にが『不良男』だ。黒井が『不良男』なら、俺はただの『クズ男』じゃないか」

松田M「俺はきっと、【アイツ】の面影を小和田に重ねているに過ぎないのだ」
松田M「こんな性格だから、【アイツ】と結ばれなかったのだろうな……」
謎の少女の声「【五年間も思い続けてくれてありがとう。本当にありがとう】」
謎の少女の声「【そんな事が出来るユウ君なら、私なんかよりもっと良い人が見つかると思います】」
謎の少女の声「【私もようやく見つかりました。これから先、変わるつもりはありません】」
松田「ゲホッ！　ゲホッ……！」
黒井「『おい！　お前大丈夫か！』」
松田M「……思い出したくもない事、思い出しちゃった……」

「//場面転換。BG、夜の学園内のバス停」

小和田「バラしたでしょ？」
松田M「二日後、夜二十一時のバス停。最終バスの到着を待つ俺と小和田」
松田「え……なんで……？」
小和田「うち、松田にしか好きな人の話してないもん」
松田M「いつもは意気揚々とした表情で、見てるこちらを元気にさせる笑顔の小和田が、今日は表情一つ変えない」
松田M「その瞳だけが、俺を睨んでいる」
小和田「……うち帰る」
松田M「俺に背を向け、バス停から去ろうとする小和田」
松田「待てよ！　どこ行くんだよ？」
小和田「歩いて駅まで帰る」
松田「夜道だぞ？！　それに歩いて一時間はかか——」
小和田「松田といるよりはマシ！！！！」
松田M「彼女の罵声が暗闇に響き渡る」

「//場面転換。BG、真っ黒（主人公の心の中を黒背景で表現）」

松田M「家に帰ってからすぐに、黒井のヤツに電話した」
松田M「黒井から聞いた所によると、小和田の水城君への想いが、水城君本人に知れ渡り、その上で水城君は小和田をフッタらしい」
松田M「小和田は自分から告らずして、先にフラれたのだと」